

# 地域おこし協力隊から見た地域の活性化



地域おこし協力隊は2009年度に制度が始まり、31の自治体に89名だった隊員は、2022年度には1,116の自治体で6,447名が活動しています。そのうち、北海道は157の自治体に943名（全体の14.6%で1位（2位は421名（6.5%）の長野県）の隊員を受け入れています。総務省では、このような隊員数の増加が地域活性化の大きな力になっていると評価し、2026年度までに隊員数を10,000人にまで増やすことを目標として、取り組みを推進していくこととしており、今後の地域おこし協力隊に関する注目度は、さらに上がっていくことが予想されます。

小紙では、2021年から地域づくりや地域活性化に関する地域からの情報発信の一つとして、道内の各市町村で活躍している「地域おこし協力隊」の人たちにスポットをあて、これまでに24名の隊員を取り上げ、その活動内容等を掲載しています。今回、掲載した過去の地域おこし協力隊の方に集まってもらい、これまでの活動を振り返り、これからの地域の活性化に向けての想いや課題、感じていることなど、地域おこし協力隊から見た地域の活性化について語っていただきました。

## 【参加者】

### ■(株)まちづくり観光デザインセンター代表

かとう けいこ 氏

### ■國本農場(元栗山町地域おこし協力隊)

國本 英樹 氏

(2021年8月号掲載)

### ■天塩町地域おこし協力隊

野口 裕康 氏

(2022年10月号掲載)

### ■八雲町地域おこし協力隊

深田 麻友 氏

(2022年7月号掲載)

**かとう** 今日は道外から「地域おこし協力隊」として北海道に来てくださり、地域で活躍されている皆さんの中から、國本さんと野口さん、深田さんにお越しいただきました。まずは自己紹介と今暮らしているまちを選んだ理由を教えてください。

**國本** 出身は横浜です。栗山町の地域おこし協力隊を経て就農し、2年目になります。私はまず農業をしたいというのが出発点で、やるなら大学時代を過ごした北海道に戻りたいと思っていました。就農地を考える中で、栗山町は大学生のときに行ったことがあり、役

※本座談会は2023年10月11日に開催いたしました。

場の人や農家さんにも知り合いがいたことが、決める際の安心感に繋がりました。就農する際には、農林水産省の補助金がもらえる準備制度があるのですが、それは、1年以内に就農するか農業法人で2年以上勤めなければ返還しなくてはいけないなど、結構使いづらい補助金でした。栗山町では、それを使わずに地域おこし協力隊の農業支援員という枠で受け入れて就農してくださいというやり方をしていたので、栗山町の地域おこし協力隊から就農しました。現在はトマトと長ネギ、とうもろこし、さつまいもを作っています。

**野口** 出身は愛知県名古屋市です。天塩町の地域おこし協力隊で3年目になります。小学生のころから登山が好きで、北海道に来たときに日本離れした海外のような針葉樹を見て感動したのがきっかけで、いつかは北海道で暮らしたいと思っていました。天塩町は北海道の中でニセコ町や富良野町など有名な観光地と比べ開発が進んでいないので、自身のスキルを活かして天塩町の観光振興に携わりたいと思いました。

**深田** 京都府宇治市出身です。八雲町でスポーツ合宿の誘致の活動をしています。2023年9月末で3年経ちましたが、コロナの特例で1年延長して4年目になりました。JICAの活動から戻って、行ったことのない地方で暮らしたいと考え、北海道が面白そうだなと思い、特に八雲町のインバウンドの受け入れや体験型観光を担当する協力隊の募集に惹かれて応募しました。

**かとう** 野口さんと國本さんは、移住前に北海道に来たことがありましたが、深田さんは初めての北海道、どうでしたか。

**深田** 西日本には行ったことがありました。留学やJICAの活動を経験し、日本でもそういった外国人とかかわることをしたかったので、八雲町はインバウンドで外国人とかかわれるというところが大きかったです。八雲町は、太平洋と日本海に面していて、私が住んでいる太平洋側の八雲地域は、「ちょうどいい田舎」という言葉がぴったりなまちで、とても暮らしやすいです。日本海側の熊石地域はまちで知らない顔の人を見かけ



深田 麻友氏

たら声を掛けるようなフレンドリーな地域です。

**かとう** 八雲町はインバウンドに関しても個性的なプログラム、もち米農家さんでお餅をつくなどありますよね。

**深田** 当初は餅つき体験にもかかわっていましたが、外国人の方が来たら農家に連れて行って、餅つき体験をしてコミュニケーションをとったりしていました。

**かとう** 野口さんも天塩町でインバウンド対応や観光に携わりたいということですが、天塩町を含めた広域で何か観光やコンテンツ開発で考えていることはありますか。

**野口** 天塩町の中では、宿泊施設や飲食店が不足していて、観光コンテンツを造成するにも自分一人ではできない状況です。町内の事業者の方と連携してやるにも、みなさん観光が本業ではないので余裕がなく、特に外国人観光客の受け入れに興味があったのですが、うまくいっていないのが現状です。また、天塩町は留萌・宗谷・上川の3つの振興局の境界に位置していて、その壁をなかなか越えられない難しさがあります。最北の原野に広がる天塩町で、日本離れした景色や酪農製品など地域資源の強みを活かした取り組みをしたいと思っています。



國本 英樹 氏

### お互いが幸せになる「栗山型」を目指して

**かとう** 國本さんは生産者として基盤を作っていくのが、今一番優先すべきことだと思うのですが。深田さんのお話を聞いて、栗山もちょうどいい田舎として今後、体験型観光やゲストハウスをするという考えはありますか。

**國本** 私は今のところ生産以外は考えていないのですが、今年、現役の地域おこし協力隊の方と札幌の私立高校生に農作業体験を提供するプログラムを行いました。当日は午前午後に分けて80人を受け入れ、とうもろこしの植え作業をしてもらいました。一人だと2日間かかる作業を1~2時間で行ってもらい、とても助かるし、高校生も楽しんでくれて、普段できない経験をしてもらった良い機会になったと思いました。

**かとう** 事前準備など大変だと思いますが、総合的に考えると「楽しい」「助かるし」お互いに幸せになる機会になっていますね。

**國本** きちんと植えられているか1粒ずつ確認するなど手間もありますが、一番いいのはお互いに楽しくできたことなので、来年も実施できたらいいなと思っています。

**かとう** 國本さんは、北海道大学で農業を学んで農林水産省を経て、栗山町で就農されています。旅行代理店からみるとすごいブランド力をお持ちです。今後、

地元の方とのネットワークを無理のない範囲で作っていけるといいですね。

**國本** そうですね。修学旅行の受け入れなど大規模に行っている町村の事例も聞いたことがありますが、宿泊がセットだったり農家としてはハードルが高く、だんだんと受け入れる側も減っているらしいです。

栗山町ではリスク等の負担を分散させて、いろいろな業種の人と協力して受け入れるという「栗山型」のやり方があるんじゃないかと思っています。

### 協力隊との繋がりと行政区について

**かとう** 八雲町の協力隊は今何人ですか。

**深田** 八雲町は13人います。農業、酪農、観光、保健福祉、教育などいろいろなフィールドで活動している人がいますが、業務で会う機会がないので、グループLINEを作って、毎月最終金曜日に集まる会があります。参加するメンバー間では話をする機会があります。また、近隣の道南エリアの協力隊ともFacebookで情報交換もできています。近隣の協力隊との活動も広がり、最近では、各地域の特産品をおにぎりの具材にする「おにぎりプロジェクト」が始まっています。ただ、業務内で他の市町村の協力隊と交流するのは難しい部分があるので、業務外で行うことが多いんです。そこがもっと柔軟になれば交流しやすくなると思います。

**かとう** 八雲町は農業、酪農、観光、保健福祉、教育なども含めて広いですが天塩町や栗山町はどうですか。

**野口** 天塩町は私を含めて2名でデスクも隣同士です。着任時に役場から言われたのは、地域の方は協力隊が何をやっているかがわからないので、とにかく最初は外部に向けてアウトプットすることを意識してと言われました。留萌管内では各市町村の協力隊が連携したプロジェクトやイベントを実施できています。ただ、天塩町は留萌市よりも幌延町や豊富町、稚内市と近いんですが、振興局が違うためかほとんど接点がないのが不思議です。非常にもったいないと思っています。

**かとう** その行政区は観光客にとっても活動しようとする野口さんにも全く関係ないことなんですがね。仕事をする上ではかなり残念です。栗山町はどうですか。

**國本** 栗山町も介護学校、ふるさと納税などいろいろな活動をしている方がいます。最近では、ファブラボという工房ができて工作を伝える方など結構幅が広いです。ただ広域となると、南空知の市町村それぞれで特徴も違いすぎて、みんなバラバラな状態なので一緒に何かするという繋がりは今のところはないと思います。

### 協力隊の活動に従事して感じたこと

**かとう** 今ここには現役のお二人方と卒業された國本さんがいますが、協力隊の活動中に感じたことなどを教えてください。

**野口** 自分が天塩町に着任したのが、コロナ禍の真ただ中で地域との交流は難しいかなと思っていたのですが、役場の方が地域に溶け込めるチャンスを与えてくれました。農林水産省で実施している「受け継ぎたい北海道の食～そのおいしさ、技、食材の魅力～」\*1という動画コンテストに応募してみないか、とお話があり、かつて開拓者たちに栄養のある料理を作っていた方の子孫の方と共同で、作物の収穫や当時のレシピを再現した「開拓汁」の動画を制作しました。撮影で家や菜園を訪問することで、交流のきっかけが生まれました。着任してすぐでしたが優秀賞を受賞し、結果もそのプロセスもすごく意味があるものになりました。

地域に自分が慣れてくると、他にも何か一緒にやろうと2022年の夏に「天塩國狂言」公演のポスターやチラシの制作を町民の方々と協力して行いました。また、自身の知識を活用できるオンラインチケット予約のシステムづくりを任せてもらえ、何度も集まって打ち合わせを重ねるうちに、さまざまな職業の方々と深くかかわることができました。しかし、次第にいろいろなことをお願いされるようになったのですが、全てに対応するのは難しく、本来自分は町のために貢献したい



野口 裕康氏

のに回らなくなってしまうといった葛藤が生まれました。

**かとう** 狂言の公演は、愛好する人が高齢で少し敷居が高いと思ったりしませんでしたか。

**野口** 最初は、地域の人たちはお金を払ってイベントに参加する習慣がないと聞いていて、集客に不安がありました。ふたを開けてみると、予約段階で売り切れになる状況でした。このプロジェクトで役場の人以外の地域の老若男女の人とかかわる機会ができてよかったです。

**深田** 当初はDMO\*2を立ち上げることを目標にしていました。八雲町だけではなく道南の広域連携だったのですが、うまくいかずストップしている状況です。今は、活動の方向転換をしてスポーツの合宿誘致を目標にしていますが、八雲町では新幹線工事のため宿泊施設が飽和状態のため、まとまった数の受け入れが難しい状況です。任期後に定住するとなると就職になります。私はソフトボールをしてできた繋がりから、八雲町内の企業から誘いを受けることもあります。待遇面などから決めかねていて、現在、本当に移住できるのかを見極めている最中です。

**かとう** 深田さんは、国体のソフトボール北海道チームの選手で、昨日鹿児島から帰られたばかりとか。

**深田** はい、小学校3年生からソフトボールを始めま

\* 1 地域の受け継いでいきたい北海道の食のおいしさと技術、食の魅力、その熱意ある背景を伝える動画を農林水産省が平成30年度から募集している。

\* 2 DMO (Destination Management Organization) 観光物件、自然、食、芸術・芸能、風習、風俗など当該地域にある観光資源に精通し、地域と協同して観光地域作りを行う法人のこと。



かとう けいこ氏

した。人口約15,000人の八雲町が、たまたま町内に7チームもあるソフトボールの盛んな町でした。また、札幌のチームから声をかけてもらい、クラブチームでもプレーしています。

**かとう** 深田さんに今日お会いしなかったら、八雲町に7チームもあるって知りませんでした。北海道でスポーツ合宿は、士別市・北見市・網走市などが先行しています。八雲町は誘致に本気なんですか。

**深田** 町の計画にも入っていますが、コロナで一旦停滞してしまいました。もう一度盛り上げたいと、町内にある約20軒の宿泊施設を回って歩き、合宿チームの受け入れのお願いをしました。今年の夏には、マツダ自動車陸上部の合宿を受け入れることができました。駅前の民宿のオーナーにはチームの要望に応じていただき、本当にありがたかったです。

今は新幹線の工事関係者で宿が埋まってる状況です。それが終わった後は、空いてくると思うので、合宿の受け入れを継続していくべきですが、それを町内の宿泊施設に説明しても現状に満足しているようで、難しさも感じています。

**かとう** 合宿中に地域との交流はありましたか。

**深田** 教育委員会の主催でランニング教室を実施し、小中高校生と一般の方も含めて50名くらい参加しました。ほかにもマツダのコーチには八雲町のスポーツの

指導者を対象に、コーチングクリニックを開催していただき、とても好評でした。

**かとう** それが、野口さんの言っていたアウトプットの一つになりますね。

**野口** そういう人たちを招いて実際に実績ができることが、地域の人を納得させるためのいい結果になると思うんです。

**かとう** 大変だけど、続けたいことの一つですね。

**野口** 天塩町で日本だけではなくアフリカ、南米からファームステイに訪れる場所があるんです。そのオーナーは自分が成長したいからと、いろいろな人を受け入れています。例えば、東京の写真家や芸術家、大学の職員が訪れて、その魅力が口コミで伝わり、人が人を呼んで来るんです。今、人手不足が天塩町に限らず、地方部でも深刻な問題だと思いますが、そこは途切れることがないほど、日本中、世界中から人がやって来る場所なのです。

仕事为目的というよりもオーナーの人柄を慕って来るという、いい循環ができている場所なんです。

**國本** その人の収益の上げ方というのは、1泊、1日いくらみたいなのはあるんですか。

**野口** 本業は畜産業で、それとは別に作物を栽培して加工販売しています。収益はアルバイト代として払っています。

**國本** 体験料を取るのではなくて、労働力として支払うんですね。それで人が人を呼び、どんどん切れ目がなくなり、人手不足とも縁がなくて、さらに募集をかける必要がないのが一番強みですね。

**かとう** WWOOF<sup>\*3</sup>というやり方で、鶴居村で上手にやってる人がいるんですけど、天塩町のケースは初めて聞きました。すごいですね。

**野口** なかなか知られてない場所だと思います。

**かとう** 途切れないのがすごいですよね。

**國本** 広告や求人にお金をかけなくてもいいのはいいですね。

**野口** そうですね。写真やデザインが専門の人が滞在

\* 3 WWOOF (World Wide Opportunities on Organic Farms)  
農場で無給で働き、「労働力」を提供する代わりに「食事・宿泊場所」「知識・経験」を提供してもらうボランティアシステムのこと。

すると、作った加工品を自分で外にアピールしてくれるので、一番の目的は労働力よりもそこだと言っていました。

**かとう** だいぶ進んでいてすごいと思います。

**野口** 私もそこで新しい商品のアイデアを出し合ったり、パッケージを一緒に作ったりして、実際に道の駅で販売しました。

**國本** 私は知っているまちでしたが、お二人は縁の無いまちに入っていくのが本当にすごいなと思って聞いていました。協力隊の仲間と話になるのが、町民や役場が協力隊に期待することと、意欲を持って町にきた協力隊に、少しずれがあることです。

私の場合は、農業をやるというはっきりした目的があったので、役場との齟齬はそんなにありませんでした。親方も研修中に他の農家さんのところへ手伝いに行かせてくれて、農家さんとの顔つなぎに気を使ってくれました。そのおかげで、知り合いも増えて農機具の心配や離農する方の情報も教えてもらい、就農の際の初期コストを下げられました。そこは親方や地域の人に感謝しきれないぐらいです。逆に農業者以外の地域との繋がりは薄かったのですが、最近、地域おこしの仲間のおかげで他の人と知り合うようになりました。

今年、東京大学の農業と地域おこしを志向しているサークルを呼んで栗山町で合宿をしました。その時に自分一人ではできないので、地域おこしの人たちに前職を活かした役回りで協力してもらいとても助けられました。農業以外にも地域を盛り上げる活動を仲間と一緒にやっていきたいと思いました。

### これから協力隊を目指す人へ

**かとう** これから地域おこし協力隊を目指す人や受け入れる役場の人に一言お願いします。気づいてもらえて配慮されたら嬉しいことや、もし自分が事前にわかっていたら活動しやすかったと思うことはありますか。

**深田** 協力隊の制度的な部分について、担当部署以外

の職員の方にも理解を深めてもらいたいです。協力隊も役場の仕組みについて着任時に研修する環境があればいいと思います。活動費を使うにしても前年度に企画しないといけないので、活動に制限が出ています。任期は3年しかないので、もう少し柔軟にしてもらえれば、もっと活動の幅が広がると思います。

**野口** 自分の場合はうまくいっています。事前に受け入れる組織の方々とプレゼンや対話を通して、目標や考えを理解し合えるか確認できる機会があれば、ミスマッチは無くなると思います。

もう一つは、着任後にどれぐらい裁量があるかです。例えば、町外で活動する場合にどのような制限があるかなど、お互いに理解しておくと思いたいです。

**かとう** そうですね。役場の常識と民間育ちの常識では、すごい乖離していることがありますよね。

**國本** 個人的な考えですが、地域おこし協力隊の制度は総務省のお金が自治体を素通りして隊員に入ってくるので、役場の担当者があまり責任感を持ってないというか、その隊員が失敗しても成功しても役場の人にとってあまり関係ない状態だと思います。

地域おこし協力隊は、良くいえば国が支援し地方に人材を送り込む制度です。悪くいうと地方自身が責任を持って人材育成できないような仕組みなんじゃないかと思います。もう少しソフト面で協力して一緒に行える雰囲気をつくるのが課題かなと思います。

天塩町のように2人しかいない地域や栗山町のように10人もいる地域もあるので、役場自身が率先してサポートしてあげればいい輪ができるんじゃないかと、地域おこし協力隊の中でもちょっと外側にいた目線からは見えませんでした。

### これからのビジョンについて

**かとう** 最後に、皆さんのこれからについてお聞かせください。

**國本** 八雲町と天塩町のお話を聞いて、栗山町とは全

然条件や求められることが違うんだなというのがわかって面白かったです。栗山町は、札幌市から1時間、新千歳空港から40分ぐらいで、産業もあって人口も1万人ぐらいで、学生や若い人の出入りが割とある恵まれた町で、そこにあぐらをかいてる面もある町なんです。だから外者に対する期待値が高いというか、そういう目線が既存の暮らしてる人の中にある気がしていて、それは八雲町や天塩町と違う面かなと思うんです。贅沢な悩みですが、外に対する期待感のハードルを少し下げて、その上でいろいろな人に継続的に来てもらう活動をどう作っていくか考えています。

例えば、私の農場が観光客や個人を対象にビジネスをするよりも、八雲町のようにスポーツ合宿で企業・団体相手に来てもらう、そういうのがビジネス的にも持続性的にも、これからの交流のあり方としてもいいんじゃないかと思っています。そういう事例を市町村同士一緒に共有できたらいいなと思いました。

**野口** 最初は自分が住んで地域に溶け込むことが目的でした。次に本州から北海道の地方部に移住するリスクを最低限に軽減したかったという目的がありました。現在、2年経って自分の事業に向けて準備を始めているので、これらの目的は達成できていると思います。今お話があったように、協力隊同士に限らず北海道が好きで何かを目指してやって来た人たちが集まり、アイデアや意志を共有すれば、一人では困難なことでも連携しながら進めていく力が生まれるので、こういう機会を大事にしてこれからも活動していきたいと思いました。

**深田** 八雲町は、廃校活用や北海道<sup>ふたみ</sup>二海サーモン、木彫り熊発祥の地などの話題性があるコンテンツを使って、地域を活性化させたいと思ってる人たちはたくさんいますが、その人たちが繋がっていないのでどうやって繋げていくか。また、そういう人たちを遠巻きに見ている町民を、どうやって取り込んでいくかという課題があります。自分たちが住んでいる八雲町は魅力あるまち、なんだと自覚してもらいたいと思います。

それを協力隊として町民の方にもっと再確認してもらえ活動をしたいと思っています。

**かとう** 私は移住者を増やしたいとか新しい取り組みをしたいと自治体の会議に呼ばれて行くときに必ず言うことがあります。メンバーは、女性3割以上、この町の20年後を考える若い人や高校生、そしていろいろなところと比較して、この地を探して選んで来た地域おこし協力隊も含む移住者、外国人などを「未来を語る会議」にメンバーとして入れてくださいと言っています。

今回の國本さんと野口さんと深田さんと話してみても、この3人が繋がったことが一つ大きかったと思います。きっと相互にもっと教えてとか、その人を紹介してとかありそうです。これからは何か必要に応じて引き合い出しながら出会う場があってもいいし、共感できる人たちが仲良くなって、プロジェクトがスタートしてもいいなと、今後の可能性を感じました。

今日はありがとうございました。

#### かとう けいこ

1963年北海道足寄町生まれ。北海道大学大学院農学研究科共生基盤学専攻（博士後期課程）単位取得退学。道新スポーツ「花新聞ほっかいどう」編集長、（一社）シーニックバイウエイ支援センター事務局長を経て、2011年に（株）まちづくり観光デザインセンターを立ち上げる。小紙2019年7月号から、北海道に移住して、新たな取り組みを実践し、輝く人を紹介しているインタビュー「飛翔のレシピ」を担当。道内外の地域活性化や観光のコンサルティングにも関わっている。

#### 國本 英樹（くにもと ひでき）

1993年生まれ横浜育ち。大学時代に全道の農家を訪れて農業に興味を持つ。2018年北海道大学農学院修了後、農林水産省に入省。農薬取締法の改正などに携わるが2年弱で就農を決意退職。道内農業法人でのアルバイトを経て、2020年4月就農実習生として栗山町地域おこし協力隊に着任。2022年に野菜農家として独立。現在2.5haで大玉トマト、長ねぎなどを栽培、コープさっぽろ近所野菜やネットショップなどで販売。

#### 野口 裕康（のぐち ひろやす）

名古屋市出身。慶應義塾大学理工学部卒業。名古屋市内の不動産管理会社を経て、2021年天塩町地域おこし協力隊に着任。情報発信コンテンツの制作・デザイン業務・町内外の教育機関と連携した活動に従事しながら、北海道の地域資源を活用した観光事業の立ち上げを目指している。総合旅行業務取扱管理者、情報処理安全確保支援士。

#### 深田 麻友（ふかだ まゆ）

京都府宇治市出身。龍谷大学政策学部卒業。アメリカへ留学。JICA青年海外協力隊でベリーズ（カリブ海に面し中央アメリカにある国）へ派遣、ソフトボールを教える。2020年に八雲町地域おこし協力隊に着任。スポーツホスピタリティコーディネーターとして、スポーツ合宿担当に従事している。